

延暦寺の中で最も高い場所にある法華総持院東塔は、最澄の伽藍構想のなかでも最も重要な場所と考えられている。最澄は仏法によって国を鎮護するため、法華經一千部を安置する宝塔を日本の6カ所に建立しようと計画した。それらは東西南北四つの方角に位置し、東は上野宝塔院（群馬県多野郡鬼石町 浄法寺）、南は豊前宝塔院（大分県宇佐市宇佐町 宇佐神宮）、西は筑前宝塔院（福岡県筑紫郡大宰府町 竈門神社）、北は下野宝塔院（栃木県下都賀郡岩舟町 大慈寺）。

中央は比叡山西塔の山城宝塔院、そしてこれらすべての総元締めとして比叡山東塔の近江宝塔院を位置づけた。最澄の生前に完成したのは、上野（東）と下野（北）の二基のみ。六基全てが揃ったのは最澄入滅後110年以上経ってからであった。

東塔は最澄最晩年の弘仁十二年（821）に亡き桓武天皇（736～806年）の御霊のために塔の心柱がようやく建てられた。最澄の弟子円仁が師の意志をつぎ、東塔を含めた法華総持院の伽藍を完成させた。

この法華総持院東塔は昭和五十五年（1980）に再建された。ご本尊は大日如来。塔の上層部には仏舎利と法華經が安置され、信徒らから奉納された写經もこの塔に納められている。